

漢文訓読体日本語におけるサ変動詞「す」の文法的記述

浅山 佳郎

Grammatical Description of the verb “su” in Kanbun-Kundoku Style of Japanese

ASAYAMA Yoshiro

This paper deals with the grammar of Kundoku style of Japanese to aim at a descriptive analysis of the irregular verb “su”. For this purpose, I used the Kundoku-reading materials of the “Four Books”, Confucian scriptures. Most of the verb “su” extracted from the materials do not have a corresponding morpheme in ancient Chinese. In that sense, it belongs to the same functional category as particles and auxiliary verbs. This paper points out the following four conclusions. First, “su” placed after a conjunctive form of adjective is a little-*v* that gives accusative case to the argument noun. Second, “su” attached to a tense form of adjective with the particle “to” realizes a matrix clause with the meaning of recognition that does not appear explicitly in ancient Chinese. I then show that these two analyses of “su” following adjectives can also be applied to “ni-su” and “to-su” that appear after the stem of nominal adjectives or after nouns. Thirdly, I show that “su” following a compound noun is just a formal element that brings out the verbal nature of that noun. Finally, I point out that “su” that follows many one Chinese morpheme is an element that combines at the lexicon stage.

1 分析の対象

本稿は、漢文を訓読した日本語文の文法をあつかうもので、そのうちのサ行変格動詞である「す」について、記述的な分析をおこなうことを目的とする¹。漢文訓読体日本語における「以て」の文法を記述した前稿でも述べたところであるが、いわゆる漢文訓読体という「文体」について、その体系的な文法研究

はなされていない²。本稿も前稿と同様に、「す」というひとつの形態素をあつかうものではあるが、いわゆる用法という意味論的な分割記述を企図するのではなく、文法体系としての訓読体日本語の記述をサ変動詞「す」を対象におこなうものである。

本稿でその資料とするのは『国訳漢文大成』本の『大学』、『中庸』、『論語』、『孟子』である。漢文訓読は長い歴史をもち、様々な「文体」をもつ³。その中で一定の体系化が図られたと思われる訓読体として、『国訳漢文大成』を選択した⁴。

本稿であつかう資料における訓読者は以下のとおりである。

- | | | |
|-----|----|-------|
| (1) | 大学 | 小牧昌業 |
| | 中庸 | 小牧昌業 |
| | 論語 | 服部宇之吉 |
| | 孟子 | 服部宇之吉 |

この訓読文を、国立国語研究所が公開する「Web茶まめ」を利用して「近代文語」UniDicとMeCabによって形態素解析し、それをもとにサ変動詞「す」の用例を抜き出して分析用のデータとした⁵。

以上のデータからサ変動詞「す」を含む用例をすべて抜き出すと、2300例を超える。この2300例以上の「す」のうち、もとの古漢語の単語を訓読した結果としての用例は、13例に過ぎない。以下の(2)－(3)のような例である。各例のうちa例が訓読体日本語、b例がそのもととなった古漢語であり、サ変動詞「す」を太字で表示する。

- | | | |
|-----|---|---------------------------------|
| (2) | a | 五覇は桓公を盛んなりとす。(『孟子』告子下) |
| | b | 五覇，桓公為盛。 |
| (3) | a | 義を見て せ ざるは勇なきなり。(『論語』為政) |
| | b | 見義不為無勇也。 |

これらの例は、すべて古漢語の「為」を訓読体日本語においてサ変動詞「す」と訓じたものである⁶。この13例以外の99.9%以上のサ変動詞「す」は、対応する単語を古漢語の本文にもたない。その意味では訓読体日本語におけるサ変動詞「す」は、日本語特有の機能形態素としての助詞や助動詞および活用語尾

類と同様に訓読用に添加された要素であり、いわゆる漢文訓読の「送りかな」部分に出現するものである。サ変動詞「す」は、助詞でも助動詞でも活用語尾でもないが、中国語である古漢語を訓読によって日本語化する際に日本語として必要となった要素であり、中国語としての古漢語に存在する要素ではないということになる⁷。

本稿で分析の対象とするサ変動詞「す」は、古漢語の「為」を直接訓読したものを除外し、古漢語に対応せず、日本語として訓読する際に必要なものとして出現する「す」である。さらにそのうち、本稿の分析対象としたのは、単独の語として構成素を形成している動詞「す」と、複合動詞を形成する要素として分離抽出できる形態素の「す」であり、これは以下のような「す」を除外することを意味する。

まずサ変動詞「す」のうち、古漢語のいわゆる介詞に対応する形態素「以て」と複合した動詞「以てす」は前稿であつかったが⁸、さらに「以て」と同様に古漢語の介詞に対応する日本語形態素とサ変動詞「す」とが複合した用例が、それ以外に3種ある。以下に「以てす」を含めてそれらを用例数とともにしめす。

(4)	a	以てす	158
	b	為にす	14
	c	於いてす	5
	d	よりす	5

これら「以てす」以外の3種も、「以てす」とほぼ同様の文法的属性をもつと考えられる。よって、最も用例の多い「以てす」についてすでに前稿であつかったので、(4 a-d)の複合サ変動詞は本稿の分析対象から外した。

つぎに動詞「欲す」は、サ変の活用をもつ動詞ではあるが、語源的にはともかく、訓読体日本語文においては「ホッ」という形態素を想定しにくく、よってサ変動詞「す」も形態素として抽出しにくい。「欲す」を「ホッ」と「ス」に分解しにくいとすれば、これはサ変動詞となりうる形態素「す」が別の形態素「ホッ」と複合したものではなく、本来的に「ホッス」という形式で1語を形成しているとみなすべきと考え、本稿の分析対象から外した⁹。

またそれと類似するとみなしうる例に「甘んず」や「安んず」のような「んず」という形式を内部にもつ動詞がある。これらも活用としてはサ変型の活用

をする。しかしながらそのサ変型活用を形成する「ず」を除外した残余の部分となる「あまん」や「やすん」は、やはり語源的には「あまい」や「やすい」を想定しうるが、「あまん」または「やすん」単独での形態素を想定しにくく、「欲す」と同様に「あまん＋す」という複合とみなしにくい。

これらの「んず」形式をもつ動詞には

- (5) あまんず／うとんず／おもんず／かたんず／さきんず／やすんず

の6種がある。これらの動詞表現については、そこに本来含まれるとみることのできる形容詞またはいわゆる形容動詞をそのまま使用した以下のような用例もある。

- (6) a 忠信にして禄を重くする。(『中庸』)
 b 小人は、つかへ難くしてよろこばしめ易し。(『論語』子路)
 c 名実を先にする者は人の為にするなり。(『孟子』告子下)

こうした「おもくす(重くす)／かたくす(難くす)／やすくす(易くす)／さきにす(先にす)」といった形式が可能であるのに、あえてそれを選択せずに「おもんず／かたんず／やすんず／さきんず」という形式を採用するのは、「おもんず」などが形容詞連用形「重く」の特別な撥音便によって形成されたものではなく、「重み＋す」といったプロセスを経て、音声的に一体性をもって形成された1語の動詞であるという判断を支持するものと考え、分析対象から外した。

これに加えて「むとす」という形式中にもサ変動詞「す」を認めうるが、これは「むとす」全体が助動詞として使用されているとみなし、やはり分析対象外とした¹⁰。

よって以下の289例は今回のサ変動詞「す」の対象から外される¹¹。

- | | | |
|-----|---------|-----|
| (7) | 欲す | 139 |
| | 「～んず」動詞 | 51 |
| | むとす | 99 |

以上を除外した残余の「す」は、大きく以下の5種類に分けられる。

(8)	1. 形容詞などの連用形に「す」が後接するもの	251
	2. 助詞「と」に「す」が後接するもの	131
	3. 一字漢語に「す」が後接するもの	1068
	4. 二字漢語または和語に「す」が後接するもの	477
	5. その他	15
	小計	1942

これらのサ変動詞「す」について、それが古漢語の単語とは対応しない漢文訓読のいわゆる「送りかな」のように挿入されている事情について、以下順を追って見ていく。

2 形容詞などの連用形に後接する「す」

いわゆる連用形にサ変動詞「す」が後接する用例は以下のように分布する。

(9)	形容詞連用形＋す	131
	名詞＋断定助動詞連用形（に）＋す	62
	形状詞＋断定助動詞連用形（に）＋す ¹²	58
	小計	251

このうちまず形容詞の連用形にサ変動詞「す」が加えられた用例をみる。

以下のような例である。サ変動詞「す」を太字で表示し、aに訓読体日本語文を、bにもとの古漢語の文を表示することは、前節と同様である。

- (10) a ひとたび君を正しく**す**れば国定まる。（『孟子』離婁上）
b 一正君而国定矣。
- (11) a 以て父母を危ふく**す**るは、五の不孝なり。（『孟子』離婁下）
b 以危父母，五不孝也。
- (12) a 衣服を悪くして、美を黻冕に致し、（『論語』泰伯）
b 悪衣服^{あつ}、而致美乎黻冕、
- (13) a 厚きを敦くして以て礼を崇うす。（『中庸』）
b 敦厚以崇礼。

これらの例からわかるように、各用例の形容詞の直前には「君を／父母を／

衣服を／厚きを」のように、対格をしめす助詞「ヲ」をもった目的語がおかれることが多い。以下にみるように、形容詞連用形に「す」が後接する用例のうち80%以上は対格名詞句をもつ。

(14)	対格目的語をもつ例	107
	目的語が主題化されて前置されている例	4
	目的語が連体節被修飾名詞として後置されている例	8
	目的語が省略されたゼロ代名詞である例	8
	対格目的語はないが与格補語がある例	4
	小計	131

この表で主題化、連体節化、ゼロ代名詞としたのは、それぞれ以下のような例である。

- (15) a 褻^{つね}の裘は長くし、右袂を短くす。(『論語』郷党)
 b 褻裘長、短右袂。
 (16) a 人の貴くする所のものは良貴に非ざるなり。(『孟子』告子上)
 b 人之所貴者、非良貴也。
 (17) a 天の物を生ずるや、必ず其の材に因りて篤くす。(『中庸』)
 b 天之生物、必因其材而篤焉。

このうち(15a)の「長くし」は主題化された「褻の裘」を目的語としており、(16a)の「貴くする」はそれに後続する「所のもの」が目的語である。いずれも移動前であれば対格が付与されたはずの例である。(17a)も、「篤くす」には直接の対格目的語はないが、その前文にある「(天の生ぜしめた)物」が目的語としてあるべきところを、ゼロ代名詞化して省略したものであり、やはり同様にもし出現していれば対格が付与される。

これら(15)–(17)のような例はすべて、形容詞にサ変動詞「す」を加えて動詞化した動詞句が形成された後に、さらに主題化といった別の文法的過程によって変容を加えられたものであるとみなしうる。その意味ではこれらもすべて対格名詞句を存在させているとみなすことも可能であるが、たとえこれらの変容例をもし除外するとしても、約8割の例に対格名詞句が出現しているということは、当該のサ変動詞「す」の出現理由が対格付与にあることをしめすも

のであると本稿は考える。以下その文法的メカニズムを解釈する。

上引した (10a) の「君を正しくすれば」の「正し」、(11a) の「父母を危ふくする」の「危ふし」、(12a) の「衣服を悪しくして」の「悪し」、(13a) の「厚きを敦くして」の「敦し」といった日本語の形容詞は、基本的に項名詞を1つとり、口語では「心が正しい／父母が危うい」のように主格（ガ格）で表示される。古漢語においても形容詞は項名詞をもち、通常の場合、その名詞は主格が付与されうるとみなすことのできる形容詞の前位置に出現する。それに対応する訓読体日本語文では、形容詞の活用のままにおかれ、項名詞は主格とみなしうるゼロ格によって表示される。

以下は、(10) - (13) の「正し／危ふし／悪し／敦し」がサ変動詞「す」を随伴させずに、本来の形容詞のままで使用された場合の例である。

- (18) a 意識にして而して後に心 正し。（『中庸』）
b 意識而后心正。
- (19) a 上下こもごも利をとれば、すなはち国 危ふし。（『孟子』 梁恵王）
b 上下交征利而国危矣。
- (20) a 色 悪しきは、くらはず。（『論語』 郷党）
b 色悪、不食。
- (21) a 其の薄うする所の者厚きは、未だ之あらざるなり。（『中庸』）
b 其所薄者 厚、未之有也。

これらの (18) - (21) の例文は、古漢語としては「心－正／国－危／色－悪／所薄者－厚」のように、名詞句は形容詞に先行する位置に置かれている。それに対しサ変動詞「す」が出現している (10) - (13) の例文に対応する古漢語は、「正－君／危－父母／悪－衣服／敦－厚」のように名詞句が形容詞に後置された位置にある。

古漢語で名詞句が形容詞に後置されるのは、いわゆる「使動式」と呼ばれる用法である¹³。使動式とは、古漢語において、形容詞や名詞などが目的語をとって他動詞として使用されることである。訓読体日本語文における形容詞に後接するサ変動詞「す」は、この使動式を日本語の中で実現させるためのものとなる。

形容詞連用形に後接する「す」は、古漢語で名詞句が本来あるべき形容詞の前位置ではなく、後位置に移動していることを日本語化するものであるとする

と、日本語としては対格の付与が必須となる。本稿は、この対格付与を目的とするという点で、サ変動詞「す」が機能範疇としての little v として機能するという分析を提案する¹⁴。なお李ほか (2015) は、古漢語における形容詞の使動式にも little v が関与するという分析をしめしている¹⁵。

たとえば (10) に引用した「君を正しくす」の「正し」は、いま形容詞の時制辞といわゆる終止形との問題を除外して考えると¹⁶,

(22) [AP[NP 君][A 正し]]

といった構造をもっており、このままで時制が付与されて発話されれば、項名詞である NP「君」にゼロ格の主格が付与され、

(23) [TP 君[[A 正し][T ϕ]]]

という構造が与えられて、「君正し。」という文に成立する。

このとき、項名詞句である「君」に目的語として対格を付与するために、little v としての「す」が添加されると¹⁷

(24) [vP[AP 君 正し][v す]]

という構造をとる。サ変動詞「す」は、動作主の含意と対格付与を実現することだけを目的とする機能範疇である。この機能範疇は古漢語には音形として存在しないが、日本語には「す」として音形化される。対格という機能範疇が、古漢語では他動詞の後位置という音形ではない手段で表示されるのに対し、日本語では格助詞という音形をもつのと並行する。形容詞の連用形に後接するサ変動詞「す」は、機能範疇 little v として如上の構造を形成するものと考ええる。

こうした構造でサ変動詞「す」が出現する例としては、ここまでみてきた形容詞の連用形以外に (9) に挙げた以下の 2 種がある。

- (25) a 名詞 + 断定助動詞連用形 (に) + す
b 形状詞 + 断定助動詞連用形 (に) + す

以下がその例文であるが、名詞と形状詞の厳密な区別には困難がともなうの

で、両者を合わせて例示する。ここから以下、特に必要があるとみとめられない場合は、古漢語の用例表示を省略することがある。

- (26) a 絵のことは素をのちにす。(『論語』八佾)
 b 夷子は本を二つにする故なり。(『孟子』滕文公上)
 c 其の徳を恒にせず、或るひは之れに羞を承む。(『論語』子路)
 d 孔子の言を雑へ引きて以てこれを明かにす。(『中庸』)

これらの用例においても、すべて対格名詞が出現している。形容詞連用形の時と同じようにうちわけをみると以下のようにになっており、対格をもつ例は形容詞の場合とほぼ同じ比率をしめす。

(27)	対格目的語をもつ例	100
	目的語が主題化されて前置されている例	1
	目的語が対格をもたずに前置されている例	1
	目的語が連体節被修飾名詞として後置されている例	1
	目的語が省略されたゼロ代名詞である例	6
	対格目的語はないが与格または共格補語がある例	11
	小計	120

名詞および形状詞の場合も、対格を付与することがサ変動詞「す」の出現理由であるとすれば、やはりこれも little v としてみなすことができ、構造的には(24)と同様のものを想定することができる。

問題は、名詞と形状詞に後続している「に」であり、この問題はまた形容詞が連用形をとっていることと通底する。もしサ変動詞「す」が一般的な動詞であるとすると、「す」自体が項名詞をとることが可能になる。その場合「名詞＋に＋す」の「に」は与格名詞であることになる。もし「す」が対格名詞句と与格名詞句の2つをとるとするなら、日本語としてはスクランブルが可能になるはずであるが、

- (28) a *夷子は二つに本をする故なり
 b *絵のことはのちに素をす

のように、スクランブルしたものとしての読みは成立しにくく、たとえば (28b) の「のちに」であれば副詞としての読みが優先してしまう。形状詞では当然ながらさらにスクランブルは成立しにくい。副詞的な読みとなるからである。

- (29) a *恒に其の徳をせず
b *明らかにこれをす

スクランブルができないということは、形容詞も名詞も形状詞も、以下の (30) にしめすように、後続要素である形容詞、名詞、形状詞が、先行要素である名詞を項としてとっていることになる。

- (30) a 君 正し
b 本 二つ
c これ 明らか

すなわち「君 正し」のように「正し」が「君」という項名詞をもち、それを「正し+す」とすることで動作主格を導入してもととの項名詞に対格を付与することができるように、「本 二つ」という述語名詞が項名詞をもっているものに、動作主格と対格付与を導入するために、サ変動詞「す」が結合したとみることができる。

このとき形容詞が

- (31) a 君 正し + す
b 君ヲ 正し く す

のように、サ変動詞「す」との結合をはかるために、接合面を連用形にしたのと同様に、名詞や形状詞でも

- (32) a 本 二つ + す
b 本ヲ 二つ に す
(33) a これ 明らか + す
b これヲ 明らか に す

のように、サ変動詞「す」との接合面を形成するために「に」が使用されていると考えることができる。このときこの「に」の品詞は問題にならない。サ変動詞「す」を導入するための音形上の調整にすぎないからである¹⁸。

以上、いわゆる連用形にサ変動詞「す」が後接する用例について、それを項名詞に対格を付与するための little v として解釈することを論じた。

3 助詞「と」に後接する「す」

前節では形容詞が連用形をとって「す」を後接させる用例をみてきた。ところで形容詞に「す」が後続するのは、前節にみた連用形だけではない。以下のような例がある。

- (34) a 秦楚の路を遠しとせざらむ。(『孟子』告子上)
b 不遠秦楚之路。
- (35) a 王如し之を善しとせば、則ちなんすれぞ行はざる。(『孟子』梁惠王下)
b 王如善之、則何為不行。
- (36) a 柳下恵は汚君を羞じず、小官を卑しとせず。(『孟子』公孫丑上)
b 柳下恵、不羞汚君、不卑小官。

これらの例における訓読体日本語はすべて

- (37) 対格名詞句 + 形容詞終止形 + と + す

となっており、前節でみた

- (38) 対格名詞句 + 形容詞連用形 + す

とは異なっている。しかし訓読対象であるもとの(34b)から(36b)の古漢語は、それぞれ「遠秦楚之路／善之／卑小官」のように

- (39) 形容詞 + 名詞

と、形容詞に直接に名詞句が後続しているだけであり、この形式は前節でみたものと変わらない。すなわち本節で分析しようとしている(37)の「形容詞終

止形+と+す」も、前節で分析した「形容詞連用形+す」も、対応する古漢語はいわゆる「使動式」という同一の形式をもっている。

ちなみに(34b)から(36b)の古漢語用例に出現しているのと同じ形容詞が、同じようにその後ろに名詞句をとっているにもかかわらず、訓読体日本語としては前節の little v として訓読されている例も多い。

- (40) a これを遠くしては君につかふ。(『論語』陽貨)
b 遠之事君。
- (41) a 奕秋は通国の奕を善くする者なり。(『孟子』告子上)
b 奕秋，通国之善奕者也。
- (42) a 宮室をいやしくして，力を溝洫に尽くす。(『論語』泰伯)
b 卑宮室，而尽力乎溝洫。

これらの古漢語の「遠之／善奕／卑宮室」は、すべて「これを遠くす／奕を善くす／宮室を卑しくす」と訓読されている。しかしながら繰り返しになるが、前節でみた形容詞連用形にサ変動詞「す」が後接する日本語文と、本節であつかう(34)－(36)の形容詞終止形に「と」と「す」が後続する日本語文は、それらが対応する古漢語の表面上の形式としては同一である。

では両者に古漢語として差はないのか。その差は古漢語の現代中国語訳という意味解釈において出現する。(34)から(36)の古漢語文は、現代語解釈である白話では以下のように解されている。なおこの現代中国語訳は、吴树平ほか(1992)によるもので、(43a-c)がそれぞれ(34b)，(35b)，(36b)の古漢語の訳となっている¹⁹。

- (43) a 就是跑到秦国，楚国，他也不嫌远，
b 您如果认为这话好
c 不以自己的官职小为卑下

この現代語訳では(34b)の「遠秦楚之路」は「跑到秦国，楚国，不嫌远(秦国や楚国にまで行くのを遠いとして厭わない)」と訳されており、同様に(35b)の「善之」は「认为这话好(この言葉を良いと思う)」と、(36b)の「卑小官」は「以自己的官职小为卑下(自分の官職を低くて劣っているとみなす)」と訳されている。ここに共通するのは、「遠い，良い，低くて劣ってい

る」という当該形容詞に対する訳語のほかに、「不嫌（厭わない）、认为（思う）、以〜为（みなす）」という認識の意味が加わっていることである。

これに対して、形容詞連用形に little v としてのサ変動詞「す」を加えた形で訓読された方の古漢語は、たとえば (10b) の「正君」や (42b) の「卑宮室」はそれぞれ以下の (44a) と (44b) のように現代語訳される²⁰。

- (44) a 纠正君主思想上的错误（君主の思想上の誤りを正す）
b 住得很简陋（粗末な家に住む）

こうした現代語訳には認識の意味はふくまれない。このことは、古漢語にあっては、

- (45) 形容詞 A + 名詞 N

という1つの形式が、

- (46) a N を Aの状態に する
b N を Aの状態にあると みなす／としてあつかう

という2つの意味になることをしめしている。

それは表面的には同一である (45) の形式が、それぞれ (46ab) の2つの意味解釈に対応するものとして

- (47) a [x ACT ON N]CAUSE[BECOME[N BE AT-A]]
b [x RECOGNIZE [N BE AT-A]]

という2種の意味構造をもつことを可能としていることを意味する。

このとき前者に対する訓読体日本語は little v として (24) のような統語構造で実現されるのに対し、後者は終止形をとっている形容詞句が「と」によって補文となっていると考えられ、(36a) の「小官を卑しとす」を例にすると

- (48) [VP[NP 小官 i ヲ][CP[ti 卑し][C と]][V す]]

という統語構造をとっていることになる。このときサ変動詞「す」は、古漢語に対応する動詞要素はないが、訓読体日本語として出現している認識の意味の動詞ということになる。

なおこの時に、本来は「小官 卑し（と）」のように、補文の主語位置にあるべき名詞句が「する」によって対格が付与されうる主文の目的語の位置に移動しており、これは日本語としては解決すべき問題であるが、訓読体日本語としては古漢語で当該名詞句が形容詞に後置されていることによって引き起こされていると考え、本稿ではこれ以上この問題には触れない。

本論にもどる。「と」でマークされた補文をとるサ変動詞「す」は、形容詞文を補文とするだけではない。前節と同様に名詞や形状詞にも後接する²¹。

- (49) a 三度その門を過ぎて入らず、孔子これを賢とす。([『孟子』 離婁下])
 b 小国大國を師として命を受くを恥づ。([『孟子』 離婁上])
 c その^{わざわ}蓄ひを利とす。([『孟子』 離婁上])
 d 君子の性とする所は大に行ふと雖も加へず。([『孟子』 盡心上])

これらもその意味解釈としては、対格名詞句に対して形状詞や名詞が記述する内容を「～とみなす／～とみなしてあつかう」という意味となる。

ここまで、サ変動詞「す」が認識の意味をもつので、その直前の「と」は補文をマークしているとしてきた。これは認識の意味をもつ古漢語の単語「為」を訓読した場合のサ変動詞「す」が同じ助詞をもつことから支持される。

- (50) a 千に百を取れば、多からずとせず。([『孟子』 梁惠王上])
 b 千取百焉、不為不多矣。

この例では、古漢語自体が「不為 [不多]」と補文をもっており、訓読体日本語はその補文末尾に「と」が補文マーカーとして付与されている。

ところで前節でサ変動詞「す」の解釈とした little v は、それ自体は項構造をもたないので、対格付与能力はあるがそれ以外の格付与能力はない。よってここに補文をしめす「と」が出現していることは、「す」が補文マーカーとしての格助詞「と」を付与していることになり、それはつまりこのサ変動詞「す」が形式的な動詞ではなく通常の動詞であることを意味する。

さらに、この「と」が補文マーカーであるということは、名詞および形状詞

に「す」が後接する際に出現する「と」についても、いわゆる断定の助動詞「タリ」の連用形の「ト」ではないということも含意する。

本稿は前節および本節で議論している形容詞、形状詞、名詞に後続するサ変動詞「す」について、先行する要素が形容詞か形状詞か名詞かに関わらず、すべてに共通する構造があることを主張する。以下その議論として、まず形容詞に「す」が後続する場合を基準として考えてみる。

形容詞にサ変が結合する場合、以下の2種類があった。

- (51) a 対格名詞 + 形容詞連用形 + す
b 対格名詞 + 形容詞終止形 + と + す

前者は「対格名詞句が形容詞の状態になることを動作主が行為する」の義であったが、後者は「対格名詞句が形容詞の状態であることを経験者が認定する」の義であった。

もしこの形容詞のこの2種の構造が、形容詞だけでなくその他の述語の場合も並行して出現しているとするなら、形状詞および名詞の場合の

- (52) a 対格名詞 + ～に + す
b 対格名詞 + ～と + す

も、同じ関係であるとなすことができる。前節で議論した通り、形容詞の(51a)が格助詞をもたない「連用形態」であるとするなら、形状詞や名詞の場合の(52a)も格助詞ではない「連用形態」であることになる。

一方で(51b)は、上述したように形容詞終止形に後接する「と」が補文を導くマーカーであると解釈される。そう仮定するなら形状詞と名詞についても(52b)は、

- (53) 対格名詞 + TP + と + す

であると想定することができる。このとき「TP」は時制をもった、すなわち活用語であれば終止形となった時制辞句を意味する。形容詞の場合は、(51b)のように、形容詞の終止形という時制辞句であったが、形状詞および名詞の場合は、(49a)の「孔子これを賢とす」を例とするなら、

(54) これを 賢ナリ と す

という、いわゆる断定の助動詞類をもったTPでありうるはずである。ただし実際はこの「ナリ」なども、時制付与（または陳述）のために必要なものとして出現しているのであり、必須の述語要素ではない。よって以下のような「ナリ」が省略される形式が可能となる。

(55) これを 賢 ϕ と す

このことは「形状詞＋と＋す」と「名詞＋と＋す」の「と」が、タリ活用の活用語尾でも断定の助動詞「タリ」でもないことを意味する。実際のところ(49a-d)で述語となった形状詞または名詞の「賢，師，利，性」が句末の述語となる場合は、「タリ」ではなく「ナリ」が使用されることが多い。

- (56) a 諸大夫皆賢なりと曰ふ。(『孟子』梁惠王下)
 b 文王は我が師なり。(『孟子』滕文公上)
 c 我 将にその不利なるを言はむとす。(『孟子』告子下)
 d 告子曰く、食色は性なり。(『孟子』告子上)

タリ活用の用例もないわけではないが、ナリの使用量の方が多いことは、こうした「賢，師，利，性」に後続する「と」が、形状詞または名詞に後接する「タリ」の連用形「と」であるという可能性を強くは支持しない間接的な根拠となると本稿は考える。

以上、訓読体日本語のサ変動詞「す」に、形容詞，形状詞，名詞を述語とする補文を「す」がとる構造があることを分析した。なお念のためにこうした「す」用例の分布数を以下にしめておく。

(57)	形容詞の終止形 に「とす」が後接する例	16
	名詞 に「とす」が後接する例	98
	形状詞 に「とす」が後接する例	9
	動詞または助動詞 に「とす」が後接する例	8
	小計	131

4 漢語および和語の単語に後接する「す」

第1節でサ変動詞「す」の分類として(8)にあげたもののうち、

- (58) 1. 形容詞などの連用形に「す」が後接するもの251例
2. 助詞「と」に「す」が後接するもの131例

については、前2節で論じた。残余は

- (59) 3. 一字漢語に「す」が後接するもの1068例
4. 二字漢語または和語に「す」が後接するもの477例

である。このうち4の「二字漢語＋す」と「和語＋す」については、和文古典および現代語に関してこれまでも多くの研究があり²²、特に現代日本語のサ変動詞「する」については、軽動詞としての分析がなされてきた²³。

一般的には以下の(60a)の「調整をする」のような、動詞性の意味をもつ名詞を対格としてとる「スル」を軽動詞構文、(60b)のような名詞に直接「する」が後続して動詞となったものをVN(動詞性名詞)構文と呼称する。

- (60) a カメラの調整をする
b 会議を進行する

本稿で分析している訓読体日本語文での二字漢語と和語に「す」が後続する例としては、如上の(60a)の形式をもつ構文は、

- (61) a 仲尼曰く、君子は中庸をす、小人は中庸に反す。(『中庸』)
b 今や純をすは儉なり。(『論語』子罕)

の2例しかない。そのほかは基本的にすべてVN構文である。これは二字漢語または和語の単語に「す」が後接したものが、少なくとも用例数からは軽動詞の編入によって起きたのではなく、当初からVN構文として、その後接する対象である二字漢語または和語の単語のもつ動詞性を実現するものであるということの意味している²⁴。

little vとして分析したサ変動詞「す」の多くは対格目的語をもっていたが、

ここで論ずる二字漢語または和語の用例について対格目的語の有無をみると以下のような状況である。

(62)	種類	全用例数	対格をもつ用例数	比率
	二字漢語	330	83	25%
	和語	147	67	46%

このように決して多くはない。実際の用例をみても

- (63) 仁義を充塞するなり。仁義充塞すれば、則ち獸を率ゐて人を食ましむ。(『孟子』滕文公下)

という用例では、「充塞す」という動詞が前半では「仁義を充塞す」と対格目的語をもつ他動詞として、後半ではその同一名詞がゼロ主格をもって「仁義充塞す」と非対格自動詞として使用されている。この例は、サ変動詞「す」が動作主を導入して名詞に対格を付与するための要素としてあるのではなく、単に「充塞」という動詞的な意味を本来もっている単語を動詞として実現するために存在していることをしめす。以下の例も同様である。

- (64) a 牛羊 茁として壮長するのみ。(『孟子』萬章下)
 b 樂歲には粒米狼戾す。(『孟子』滕文公上)
 c 小徳は川流す。(『中庸』)

このことは上引した「充塞」であれば、「仁義充塞」または「仁義の充塞」のように、VN自体が項となりうる名詞をとりうることを前提とする。(64)の諸例も同様に

- (65) a 牛羊の壮長
 b 粒米の狼戾
 c 小徳の川流

のようにすることが可能である。このVNがそれ自体の意味構造をもち、動詞として形成されていなくても項名詞をもちうるという分析は、日本語のVNに

ついてよく指摘されるところであり、本稿が分析する訓読体日本語においても同様である。

よって二字漢語に後接するサ変動詞「す」は、項名詞を意味構造上で確保するためのものではない。また上でみたように対格を付与できる他動性のためでもない。意味構造としても統語的处理としても、VN 自体が潜在的にその能力を保有しており、サ変動詞「す」は、それを実現して時制辞句（または陳述句）としての文を成立させるためのものであると考える。このことは、議論の詳細は省略に従うが、和語の名詞または副詞にサ変動詞「す」が後接する場合も同様である²⁵。

最後に1068例という最大の用例数にのぼる「一字漢語に「す」が後接するもの」がある。以下のような例である。

- (66) a 子の靈丘を辞して士師を請ふは似たり。(『孟子』公孫丑下)
 b 兵刃既に接し、甲を棄て兵を曳いて走る。(『孟子』梁惠王上)
 c 崔子 斉の君を弑す。(『論語』公冶長)
 d 市に帰する者止まず、(『孟子』滕文公下)

この (66a-d) の例文中の一字漢語「辞、接、弑、帰」は他の名詞と「靈丘を辞す」や「兵刃接す」や「君を弑す」や「市に帰す」のように共起している。しかしその共起名詞は

- (67) a *靈丘の辞
 b *兵刃の接
 c *君の弑
 d *市の帰

という形式では表出できない。(65) でみた二字漢語とは対照的である。すなわち「辞」や「接」や「弑」や「帰」は単独で項名詞をもてない。というよりこれらの一字漢語は、その多くが非自立語であり、

- (68) ジ (辞), セツ (接), シイ (弑), キ (帰)

という音形では、形態素としての認定すら不安定である。

このことは、こうした一字漢語は、文字として存在することによってはじめで音声化も可能であり、かつそれらを動詞として使用する場合は、サ変動詞「す」との結合が必須であるということを意味する。さきにみた二字漢語が、サ変動詞「す」をもたなくとも、「充塞／壮長／狼戾／川流」だけで存在しうるのは異なる。

ただしサ変動詞として使用される一字漢語でも

(69) 愛す 命ず 禄す 利す 死す 信ず

などについては、「愛、命、禄、利、死、信」だけで訓読体日本語における形態素として自立的でありうる。よって一字漢語はすべてが同じ類にあるわけではないが、この後者の自立的な一字漢語は、二字漢語などと同じ文法的特性をもつと考えられる。

それ以外の(68)のような一字漢語は、他の名詞を文法的に指定するような構造を、訓読体日本語の中においてはもちえない。とするならこうした一字漢語のサ変動詞は、レキシコンで当該の一字漢語と「す」が結合されて、本来的に動詞として登録されているとみることができる。

以上、訓読体日本語中に出現するサ変動詞「す」について、その文法を以下の4つにわけて論じた。

- (70) a 連用性の形容詞、形状詞、名詞に後接する「す」は項名詞に対格を付与するための機能範疇 little v であること。
b 形容詞、形状詞、名詞に加えられた「と」に後接する「す」は、古漢語では形態的には出現しないが、意味的に存在している論理構造を実現するための認識の意味をもつ通常の動詞であること。
c 二字漢語名詞などに後接する「す」は、その名詞が本来もっている動詞性を発現させる形式的な形態素であること。
d 一字漢語の多くに後接する「す」は、レキシコン段階で当該漢語と結合して動詞を形成する形態素であること。

注

- 1 動詞「す」の概観については、山田孝雄（1936）のp.149, pp.256-257, pp.648-658, pp.718-721が要を得る。
- 2 藪（1993）は、「訓読による漢文読解法は必須科目として漢文の古典を大量に読んでいた時代の方法から一部の例外を除けば依然として脱却しきれておらず」と指摘する。最近では、コンピュータを利用した訓読生成について、安岡（2020）や王ほか（2023）といった研究が行われている。
- 3 大島（2017）および齋藤（2011）を参照されたい。
- 4 『大成』は、1920年から1924年にかけて国民文庫刊行会から刊行された叢書で、その訓読および訳注者には、近代における中心的漢学者であると同時に、漢文訓読の基準となった1912年の「漢文教授ニ関スル調査報告」（『官報』第8630号）の中心的な責任者である服部宇之吉が加わっている。
- 5 <https://chamame.ninjal.ac.jp/index.html> なお茶まめについては、堤ほか（2023）を参照のこと。また解析結果は、論者の浅山がさらに改修して使用しており、形態素認定などに問題がある場合は、すべて浅山の責任であることを付記しておく。
- 6 古漢語の「為」は全部で748例。このうち、サ変動詞「す」に訓読した13例を除外すると、名詞の「ため」が102例、断定の助動詞「たり」または「なり」が108例、「なす」や「なる」または「つくる」といった一般の動詞が484例、その他が41例である。
- 7 「す」が代動詞的な形式用言であることについては山田（1936）も述べているが、詳細は現代語の「する」について、村木（1991）のpp.203-297を参照のこと。
- 8 浅山（2023）pp.8-14。
- 9 「欲する」や以下の「～んず」の活用については、田野村（2001）がサ変動詞としての「ユレ」を指摘する。
- 10 古典和文における法助動詞としての「むず」とその本来の形式とみなしうる「むとす」については、小田（2015）pp.195-196などを参照。
- 11 このほかに、サ変動詞「す」との関係でいえば、接続助詞「して」も、語源的にはサ変動詞「す」を含むと考えうる。これらの用例数は462例にのぼるが、本稿では、接続助詞とみなして分析対象外とした。なお古典和文における接続助詞としての「して」については、小田（2015）pp.481-482などを参照。
- 12 本稿のデータの基礎が、茶まめが利用するMeCabによる形態素解析なので、そこで使用される「形状詞」という用語を、以下の行論の中でも使用する。いわゆる形容動詞に相当するもので、形容動詞の語幹部分が「形状詞」、その活用部分は断定の助動詞「なり」および「たり」という分析である。
- 13 使動式については、王力（1981）pp.342-345、石村（2014）などを参照されたい。
- 14 日本語におけるlittle vについては、Hasegawa（2001）、長谷川（2007）を参照のこと。
- 15 李ほか（2015）は、「形容词经过两次移位，先移位与轻动词“变得”结合，再次移位与轻动词“使”结合，产生“形容词+名词／代词”的句式」と述べる。なおここでは「軽動詞」という用語が使用されているが、具体的に分析として示されているのはA（形容詞）を補部としてとるv（little v）である。
- 16 現代日本語についてではあるが、形容詞の時制については、安井ほか（2021）および安

井ほか（2022）を参照されたい。

- 17 他動詞をつくる little v の付与する対格については長谷川（2007）を参照。
- 18 「に」が連用的な機能をもつ形態素であることについての議論は、城田（1998）の pp.246-248 に指摘がある（城田の用語では「副詞形」）。
- 19 吳ほか（1992）は、中国の古典言語学者である楊伯峻を編輯顧問とし、『大学』と『中庸』は王啓發の現代語訳、『論語』は楊伯峻と吳樹平の現代語訳、『孟子』は孟慶錫と魏連科の現代語訳による。なお以下の（48a-c）は、それぞれ当該書の p.309, p.183, p.205 による。
- 20 吳ほか（1992）の p.257, p.79。
- 21 当然ながら、本節で論ずる認識の意味を含んで解釈されうる通常の動詞としてのサ変動詞「す」は、形容詞と形状詞と名詞述語だけではなく、「父兄百官我を足れりとせず」（『孟子』滕文公上）のような動詞述語文も存在する。今回の調査では8例あった。なお前節で論じた little v として解釈されるサ変動詞「す」について動詞句の用例はない。対格付与を little v の出現理由とするなら、目的語となるべき内項名詞句をもつ動詞は他動詞として実現することができるので、自他動詞を区別する接辞内部にこのサ変動詞「す」に類似する「s」音の要素が出現するとしても、それはサ変動詞ではなく、little v としての「す」は動詞句をとらない。
- 22 ここでは影山（1993）、および比較的最近のものとして、漢語について庵ほか（2015）と和語について石塚（2012）をあげておく。
- 23 現代語のサ変動詞「する」の軽動詞分析については、Grimshaw ほか（1988）、Fujinami ほか（1998）、堀田（2001）、Sakai ほか（2004）などを参照されたい。なお「軽動詞」と「little v」との関係については、さまざまな問題があるが本稿ではこれには触れず、動作主を導入し項名詞に対格を付与するための機能範疇が「little v」であり、動作性の名詞を対格でとる形式上の動詞を「軽動詞」として区別しておく。
- 24 日向（1985）は、現代語の漢語サ変動詞について、「前部と後部、あるいは、前部と後部の何れかに動詞性の訓や意味をもつ漢字か、（中略）一字で漢語サ変になる文字で構成されている」ことを指摘する。
- 25 和語名詞に「す」が後接する場合というのは、「民を罔する（『孟子』梁惠王上）」などの例である。前節でみた「名詞＋に＋す」という構造を適用した「民を罔にする」という表現との差の問題が残存するが、これはまた稿をあらためたい。

参考文献

- 浅山佳郎. 2023. 「漢文訓読体日本語における『以て』の文法的記述」. 獨協大学国際教養学部『マテシス・ユニウェルサリス』25(1) : 1-21
- 石村広. 2014. 「『使動用法』再考：陳承澤の『活用』説をめぐって」. 『中国文化：研究と教育』72 : 16-27
- 大島晃. 2017（もと1982）. 「江戸時代の訓法と現代の訓法」. 『日本漢学研究試論』及古書院 : 377-405
- 庵功雄, 張志剛. 2015. 「漢語サ変動詞に見る近代語と現代語」. 『日本語の研究』11(2) : 86-100
- 石塚直子. 2012. 「和語サ変動詞の用法と格表示」. 『筑波日本語研究』17 : 66-82

- 影山太郎. 1993. 『文法と語形成』. ひつじ書房
- 小田勝. 2015. 『事例詳解古典文法総覧』 和泉書院
- Grimshaw, Jane and Armin Mester. 1988. Light Verbs and Theta-Marking. *Linguistic Inquiry* 19(2) : 205-232
- 齋藤文俊. 2011. 『漢文訓読と近代日本語の形成』. 勉誠出版
- Sakai Hiromu, Ivana Adrian and Zhang Chao. 2004. The Role of Light Verb Projection in Transitivity Alternation. *ENGLISH LINGUISTICS* 21(2) : 348-375
- 城田俊. 1998. 『日本語形態論』. ひつじ書房
- 田野村忠温. 2001. 「サ変動詞の活用のゆれについて」. 『日本語科学』 9 : 91-103
- 堤智昭, 小木曾智信. 2023. 「複数のUniDic辞書による形態素解析支援ツール『Web茶まめ』の実装と運用」. 情報処理学会論文誌 64(3) : 749-757
- 長谷川信子. 2007. 「日本語の受動文と little v の素性」. *Scientific approaches to language* 6 : 13-38
- Hasegawa, Nobuko. 2001. Causatives and the Role of v: Agent, Causer, and Experiencer. Grant-in-Aid for COE Research Report (No.08CE1001) *Linguistics and Interdisciplinary Research: Proceedings of the COE International Symposium*, ed. by Kazuko Inoue and Nobuko Hasegawa : 1-35
- 日向敏彦. 1985. 「漢語サ変動詞の構造」. 『上智大学国文学論集』 18 : 161-179
- Fujinami Tsutomu and Nanz Christine. 1998. The Light Verb Constructions in Japanese. *Universitat Stuttgart*
- 堀田秀吾. 2001. 「日本語の軽動詞に関する考察：意味と形」『立命館言語文化研究』 12(4) : 69-87
- 村木新次郎. 1991. 『日本語動詞の諸相』. ひつじ書房
- 藪敏裕. 1993. 「漢文訓読法テキスト教材の開発」. 『岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』 3 : 266-282
- 山田孝雄. 1936. 『日本文学概論』. 宝文館
- 安井美代子, 浅山佳郎. 2021. 「日本語の時制解釈と現在時制形態素の有無について」. 日本語文法学会第22回大会予稿集
- 安井美代子, 浅山佳郎. 2022. 「物語モードの時制解釈の日英中対象研究：談話表示理論の視点から」. 『2018-21科研費研究成果報告書：主節構造と意味解釈のインターフェース』 : 103-127
- 安岡孝一. 2020. 「漢文自動訓読ツールUD-Kundokuの開発」. 東洋学へのコンピュータ利用第32回研究セミナー : 3-25
- 李菲菲, 谌莉文. 2015. 「古汉语中使动类轻动词句法语义研究」. 现代语文 (语言研究版) 2015(05) : 72-75
- 王昊, 清水博文, 河原大輔. 2023. 「言語モデルを用いた漢詩文の返り点付与と書き下し文生成」. 言語処理学会第29回年次大会発表論文集 : 3031-3036
- 王力. 1981. 『古代汉语修订本』. 中华书局
- 吴树平, 赖长扬. 1992. 『白话四书五经』. 国际文化出版公司

